

 <p>昭和46年開校 平成25年CS指定</p>	<p>野火止小だより</p> <p>学校地域教育目標 考え学ぶ子 仲よくする子 たくましい子 地域を愛する子</p> <p>野火止小は保護者や地域と共にあるコミュニティ・スクールです</p>	<p>めざす学校像 -全ての児童が確実に伸びる学校-</p> <p>9月号 令和7年9月1日 新座市立野火止小学校 児童数 542名・学級数 21学級 住所 新座市野火止 4-9-1 TEL 048-477-1211</p>	<p>9月の生活目標 落ち着いて学習しよう ・何だろう？ふしぎだな。もっと知りたい。 を大切に ・自分のめあてをもつ</p>
--	--	---	--

長月 学校の『ふつう』をアップデートする

校長 丹代 円

毎年夏季休業中に新座市立小・中学校全校の教職員が集まって行われる夏季教職員全体研修会があります。今年度は、「多様な子どもがいることを前提としたインクルーシブな学校づくり」という演題で一般社団法人UNIVA理事 野口 晃菜氏による講演会が行われました。今回はその講演の内容を紹介しながらこれからの学校づくりについて考えてみます。

野口氏は現在、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程企画特別部会委員として次期学習指導要領の作成に携わっている方です。今回の改定に向けた中央教育審議会への諮問文の中に、「大幅に増加している不登校児童生徒をはじめ、特別支援教育の対象となる児童生徒や外国人児童生徒、特定分野に強い興味や関心を示したり、特異な才能のある児童生徒への支援の充実とともに、多様性を包摂し、一人ひとりの意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題です。これらに正面から向き合うことは、我が国の社会及び教育の積年の課題でもある『正解主義』や『同調圧力』への偏りから脱却するとともに、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させ、社会の分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会を実現する観点からも極めて重要です。」という表現があります。この中の「包摂」という言葉がインクルーシブということになります。野口氏は自身が6年生の時に埼玉県内の小学校からアメリカの小学校に転校したそうです。その時、アメリカの小学校では、同じクラスに車いすの児童や聴覚に障害のある児童がいたそうです。その時、「日本ではクラスに障害のある児童はいなかったけれども、日本に障害のある児童がいないのではなく、同じ小学校で学んでいないので

その存在を知らなかった」ということに気づいたそうです。

研修会では、「あなたにとっての『ふつう』は何ですか？」と質問されました。「休み時間に外に出て遊ぶのは『ふつう』？」「本を座って読むのは『ふつう』？」「自分は『ふつう』の人である？」等々。様々なことへのとらえ方は人それぞれです。インクルーシブ教育とは、インクルーシブな社会の実現に向けて多様な子供たちに合わせて学校を改革し続けるプロセスであり、多様な子供が学校に合わせるのではなく、多様な子供に学校教育が合わせていく取組であること。そのために、今の学校の『ふつう』を問い直すプロセスであることが強調されていました。これまで、個人の困り感に対しては、「個人モデル」での対応が図られることが多く、その個人の変容を図るようなアプローチがほとんどでした。一方で、今後は「社会モデル」でのアプローチを考え、環境や制度を変えることでより多くの人と共に生きる社会を実現できれば包摂性が高まっていくといえます。マジョリティ仕様に作られている社会（学校）には、そもそも多様な人々が想定されておらず、建物や施設設備、制度、慣行、偏見、無知、無関心など様々なことを乗り越えて社会的（学校の）障壁を解消していく必要があります。新たな学習指導要領では硬直した制度ではなく、少しでも柔軟に教育課程を編成できるような制度にできるように改定を進めているということでした。



野火止小学校もよりインクルーシブな教育が行われるよう、互いのコミュニケーションを充実させ、日々改革を進めてまいります。2学期も引き続き、保護者・地域の皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。